

週刊 **日本医事新報**No. **4793****2016/3/5**

3月1週号

p19 特集

小児アレルギー性皮膚炎治療update

- 経皮感作と食物アレルギー(猪又直子)
- バリアを守る新生児期からのスキンケア(佐々木りか子)
- 新しい食物アレルギーの指導ならびに治療の実際(夏目 統ほか)

p1 巻頭

- 外来診断学:細菌性髄膜炎治癒後の微熱と頭重感を主訴に受診した76歳男性(生坂政臣ほか)
- プラタナス:補助人工心臓による小児重症心不全治療の進歩(小野 稔)

p8 NEWS

- 特別企画:震災5年 医療は今—第1回「過渡期を迎える陸前高田の医療」
- 医師法21条一日医が改正案を公表、医療界から異論も
- OPINION:長尾和宏の町医者で行こう!!
- 人:小林弘幸さん

p42 学術

- J-CLEAR通信:“種まきトライアル”って知ってますか? —販売促進を目的とした臨床試験に“NO”を(桑島 巖)
- 過敏性腸症候群の病態生理:IBS beyond the mucosa(富永和作ほか)
- 他科への手紙:耳鼻咽喉科→内科、救急科(平井美紗都)
- 差分解説:肺癌治療の新展開:免疫療法 他6件

p58 質疑応答

- Pro⇔Pro:免疫調整薬チオプリン製剤の使いわけのコツ 他3件
- 臨床一般:骨髄異形成症候群の低リスク群治療に蛋白同化ステロイドは使われている? 他1件
- 基礎・研究:なぜヒトにはビタミンKの合成能力がない?
- 法律・雑件:満月時と新月時での潮汐の状況は?

p68 エッセイ・読み物・各種情報

- 小説「群星光芒」 ● ええ加減でいきまっせ!
- 私の一冊(中村重信) ● Information ● クロスワードパズル
- 漫画「がんばれ!猫山先生」

p78 医師求人/医院開業物件/人材紹介/求縁情報



尾崎 発



長尾和宏の

まちいしや 町医者で 行こう!!

第59回

「東北、阪神、そして台湾」

阪神の5年後、東北の5年後

東日本大震災から5年が経過しようとしている。あらためて多数の犠牲者のご冥福をお祈り申し上げます。また震災以降、今日までご尽力されてきたすべての皆様に敬意を表します。

さて、被災地における復興の足音は地域によって様々であろう。特に福島県では原発の影響でいまだに震災直後のままになっている地域もある。確実に言えるのは、東北は阪神淡路大震災後の復興スピードより遅いということだ。阪神の5年後といえばマンションの再建や街の再開発計画で揉めていたりしましたが、総じて着々と復興が進んでいた。その主な理由は大阪という大都市の被害が少なかったことや、被害が阪神間～淡路島という比較的狭い地域に限定していたことがある。一方、東北の被災地はあまりに広大で、大半が人口密度が低い地域である。

私は2011年7月11日、すなわち東日本大震災からちょうど4カ月目に東北の復興に関する提言を書いた。『共震ドクター～阪神そして東北』（ロハスメディア）という本である。いわゆる二重ローンの問題、孤立死の問題、そして防災に関する提言等を「無常素描」という記録映画とともに発信した。阪神での教訓を東北の復興に何とか活かして欲しいという一念で、急いで出版にこぎつけた。しかし出版時期があまりに早すぎたのか、残念ながら本書は多くの人の目に触れることなく勇み足に終わっている。そして震災から5年が経過した今、本書を読み返してみて、「これは震災から5年経ったところに出すべきだったな」と少々反省しているところである。

たとえば仮設住宅での引きこもりに伴ううつ、肥満や糖尿病、アルコール依存症、孤独死などの増加

が今ごろになって報道されている。私は阪神での経験から早晚必ずこうなると確信していたのだが、仮設住宅に多数の支援者が入っていてもなかなか二次災害を食い止めることはできない厳しい現実が続いている。災害看護の第一人者であった故・黒田裕子看護師がもし生きておられたら、気仙沼市立面瀬中学校の仮設住宅に今も泊まり込んで支援活動を続けていたはずだ。私も何度か被災地に足を運んだが、たいした力にもなれていない。被災地の本当の復興はこれからだと知っているのに、自分に何ができるのか自問自答する日々である。

台湾への恩返し

東日本大震災の後、台湾から多額の義援金の寄付をいただいたことが報道された。しかし昨年、台湾を訪問したときある人にこう言われた。「日本人はあの時の台湾人の援助のことを忘れたのか?」。もちろん忘れてなどいないのだが、単なるお礼だけではそう思われても仕方がないのかと思った。そんな折、台湾南部で大きな地震があった。被害がある一棟のビルに集中したことから人災という側面も指摘されている。今回、早期に台湾への義援金援助を呼びかけた日本人が何人もいて心強い思いをした。ほんの少しだけ台湾にお返しができただかもしれない。

一昨年、昨年と計3回ほど台湾を訪問する機会があった。本コラムでも触れたように台南にある成功大学のひとりの看護師が中心となり台湾のリビングウィルの法的担保が2000年になされた。また台北郊外にある仁徳医専における死亡体験カリキュラムも圧巻であった。我々が台湾の医学・看護教育に学ぶことはたくさんある。台湾でいろんな人と出会い

彼らの熱意に圧倒されてきた。今後の日本と中国との関係を考えて時、台湾との民間外交は極めて重要である。昨年10月には台湾の国慶節のセレモニーにも参加した。レセプションパーティでは世界からの招待客とお話する機会があった。

なぜ、台湾なのか？とよく聞かれるが、台湾は70年前までは日本だった。特攻隊も飛び立っている。しかし現在は正式には国交がないので民間外交がとても大切、という想いがある。その台湾の高齢化は日本のあとを追っている。そんな中、私の本も数冊、翻訳本として多くの台湾の人にも読んで頂いてもらっている。そうしたご縁もあるので台湾への恩返しは今回の支援だけに終わらせず長く意識していきたい。

復興とは地域包括ケアの構築

鎌田實先生は「陸前高田の在宅療養を支える会」の支援を続けておられる。復興を地域包括ケアに繋げようと何度も陸前高田を訪れ、市民や多職種と笑顔で交流している様子をメディアで拝見した。しかし岩手、宮城、福島の被災3県では10年前に比べて人口が15万6千人も減少しているという。陸前高田も3500人以上も減少し高齢化率は35%にも達している。しかし鎌田先生は「ピンチをチャンスに変える」をスローガンに支援を続けている。まだ建物の再建はまばらな陸前高田であるが、目に見えない人と人との関係作りは着々と進んでいる。そこには震災を契機とした地域包括ケアが芽生えつつある。

東京大学の山上広特任教授らは福島県相馬市や南相馬市の支援活動を続けておられる。最近、いわき市の医師不足の原因を分析し、研修医にとって魅力的な研修システム作りを提言されている。南相馬市民病院や公立相馬病院は、いわき市とは対照的に震災前より大勢の研修医で賑わっているという。アイデア次第で研修医が集まる事が証明されている。鎌田先生や上先生だけでなく、たとえ不定期であっても現在も東北の被災地を支援し続けている医師・看護師らは私が知るだけでもたくさんおられ、本当に頭が下がる。

一方、何度も行けていない私などは、5年目を降何ができるのだろうか。「被災地支援フェア」を通りがかると美味しそうなものを買って込んでいいるが、遠く離れた我々にできることはたくさんあるはずだ。

今後もなにかと用事を作って東北の地を徘徊したいと考えている。また震災を機に知り合った被災地の人達との交流もずっと温めていきたい。慢性期の支援は継続性が求められる。医療も慢性期の重要性が謳われているが、震災復興も慢性期の関わり方がより大切になる。被災地は全国各地が抱える諸問題を先取りしている。被災地の復興とは地域包括ケアの構築にはほかならないことをしっかり意識したい。

平時の机上訓練

当院が従事している在宅医療の現場には、ALSなどのため人工呼吸器を装着した患者さんが常時数名はおられる。海拔ゼロメートル地帯の尼崎に万一津波が押し寄せたら、本当に大変な事態になるだろう。だから普段からの防災訓練や防災意識が大切である。何度もそのような趣旨の講演をしていた。しかし「天災は忘れたころにやって来る」ではないが、5年が経過して少しずつ震災の記憶や防災へのモチベーションが低下している。今回の節目を、防災をあらためて意識し直す機会にもしたい。

福島県相馬市長の立谷秀清先生が繰り返し言っていた言葉が忘れられない。「防災とは平時から机上訓練をしっかりとっておくことだ」。机の上でサイコロを振り、ランダムに状況が変化すると仮定する中、臨機応変に対応していく力が災害への初期対応に求められるという。最近、医療安全の分野で耳にする「レジリエンス」(=折れずに状況に対応しようとする力)という考え方とどこか似た部分があるように思う。我々は複雑系の中で日々、医療に従事しているが、レジリエンスという観点からも個々の行為を見直しておくといい。

震災1~2年目にあれだけ盛んだった防災の啓発も、最近はずっと影が薄まりつつある。それが人間の常なのだろうが、普段から防災や危機管理を頭の片隅に置いておくのが医療者の宿命であろう。平時にこそ、不測の事態や災害を想定した机上訓練を繰り返すことがどれだけ大切であるかを震災5年目に思い直している。

ながお かずひろ：1984年東京医大卒。95年、尼崎市に複数医師による年中無休の外来・在宅ミックス型診療所「長尾クリニック」を開業。近著に「親の「老い」を受け入れる」(ブックマン社)など